

観光地における休憩所の設置が来街者の滞留行動に与える影響に関する研究

21-3A294 皆木 大輝
指導教員：西村 亮彦

近年、コロナ禍が明けたことや、円安に伴うインバウンド需要の増加を受けて、浅草のまちは観光地としての賑わいを取り戻している。浅草駅・雷門・仲見世・浅草寺にかけて歩行者が極端に集中していることから、面的な回遊行動の促進が課題とされるとともに、まちなかに休憩できる滞留空間が乏しいことが課題とされている。なお、ウォークアブルなまちづくりに取り組む台東区では、浅草のまちなかにおける滞留空間の拡充に向けて、継続的な社会実験に取り組んでいる。そこで、浅草の雷門周辺を対象に、①滞留行動の分布や休憩所の利用状況を把握するとともに、②令和5年度に行われたパークレットの社会実験の成果と課題を明らかにした上で、③観光地としての滞在快適性や回遊性の向上に効果的な休憩所のあり方を考察する。

キーワード：休憩所、観光地、社会実験、パークレット

1. はじめに

(1) 研究の背景

近年、コロナ禍が明けたことや、円安に伴うインバウンド需要の増加を受けて、浅草のまちは観光地としての賑わいを取り戻している。令和4年度の台東区観光統計分析によると、年間観光客数は2912万人で、その内47万人が外国人観光客であった。

台東区では令和4年度に浅草地区まちづくりビジョン策定委員会、及びまちづくり部会を設立し、アフターコロナのまちづくりに向けた検討を進めている。浅草駅・雷門・仲見世・浅草寺にかけて歩行者が極端に集中していることから、面的な回遊行動の促進が課題とされるとともに、まちなかに休憩できる滞留空間が乏しいことが課題とされている。

ウォークアブルなまちづくりに取り組む台東区では、浅草のまちなかにおける滞留空間の拡充に向けて、継続的な社会実験に取り組んでいる。令和5年度には雷門付近の路上にパークレットを設置する社会実験を実施した。

本研究は、浅草の雷門周辺を対象に、①滞留行動の分布や休憩所の利用状況を把握するとともに、②令和5年度に行われたパークレットの社会実験の成果と課題を明らかにした上で、③観光地としての滞在快適性や回遊性の向上に効果的な休憩所のあり方を考察することを目的としている。

(2) 研究の対象

本研究では、観光客が集中する浅草の雷門周辺を、調査・実験の対象地とする。現状調査の範囲は、現在策定中の浅草地区まちづくりビジョンで浅草の中心エリアと位置付けられている、馬道通り、言問通り、国際通り、雷門通りに囲まれた約30haのエリアとする（図-1）。



図-1 研究対象地と令和5年度の社会実験実施箇所



写真-1・2 パークレット社会実験の様子

(3) 研究の方法

- 1章：はじめに
- 2章：浅草地域における滞留行動の現状分析（エリア内の滞留行動や休憩所の利用状況とを目視で調査）
- 3章：パークレット社会実験（パークレットの利用状況を定点動画より分析）
- 4章：まとめ・考察

(4) 研究の位置づけ

街路における滞留空間の利用実態を行動調査とアンケート調査から把握した中川¹⁾や、まちなかにおける休憩空間の選好と空間評価の関係を明らかにした鈴木ら²⁾など、滞留空間や休憩所の利用について、行動調査やアンケート調査を実施した研究は数多く見られる。

本研究は、観光地を対象として、現状調査から継続的な社会実験までの一連の取り組みを通じて、今後の休憩所の整備に資する知見を得るものである。

2. 浅草地域における滞留行動の現状分析

(1) 滞留行動・休憩所の調査

浅草地域における来街者の行動を、GoPro カメラを用いた動画撮影により調査した。令和6年12月2日(月)、8日(日)の計2日間、それぞれ12時、15時、18時から撮影を行った。対象エリア内のオープンスペースをくまなく調査するため、3つの調査ルートを設定した(図-2・3・4)。調査の方法は、3名の調査員がそれぞれのルートを徒歩で移動し、首から下げたGoProカメラで歩行者の行動を撮影した。

カメラ映像より、性別、年代、国籍、滞在场所、姿勢、行動(何をしているか)等のデータを抽出するとともに、ArcGISを用いて地図上に位置をプロットした。

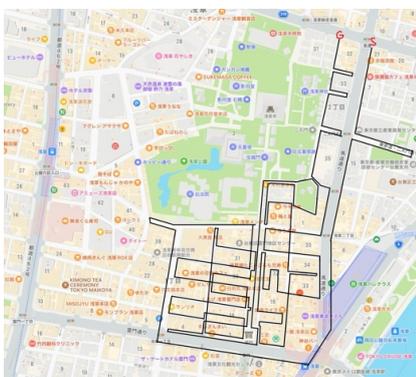


図-2 調査ルート1



図-3 調査ルート2

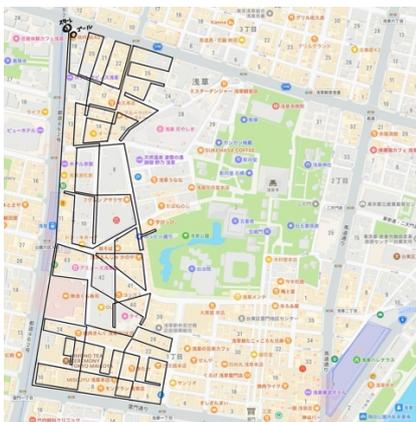


図-4 調査ルート3

(2) 滞留行動の分析

12月2日(月)に12時から行われた調査のカメラ映像から、性別、年代、国籍、滞在场所、姿勢、行動(何をしているか)等のデータを抽出し、その位置を地図上にプロットした(図-5・6・7・8)。

滞留行動している人の内、飲食・買い物をする人の多くは仲見世通りや商店街が多く、写真撮影をする人は雷門や浅草寺といったランドマーク周辺に集まっていることがわかった(図-5)。多くの来街者が複数人で来ていたこともあり浅草の街全体で会話をしている人が多く存在することがわかる。

また、まちなかに出された机や椅子を利用している人が多く見られた。一方で、路上に座ったり壁に寄りかかって休憩をしている人も多く見られ、このような人々は仲見世通りなどが集中している場所でより多く見られた(図-6)。

昼という時間帯もあつたか沿道の店舗で食べ物を買い、近くで食べる人が多く見られた。また、高齢者や海外からの来街者を中心に、浅草寺周辺にある芝生空間や休憩所などで休憩している人の姿がとて多く見られた(図-7・8)。

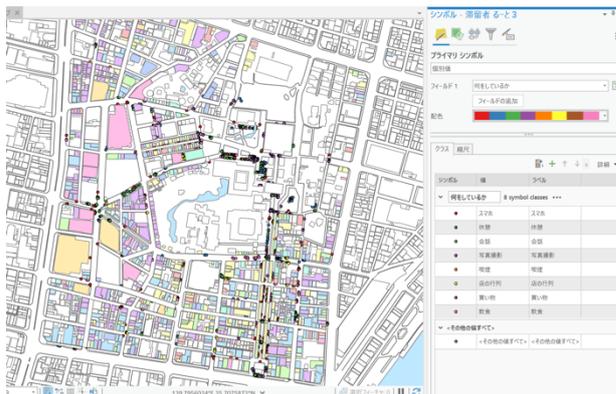


図-5 行為別に見た滞留行動の分布

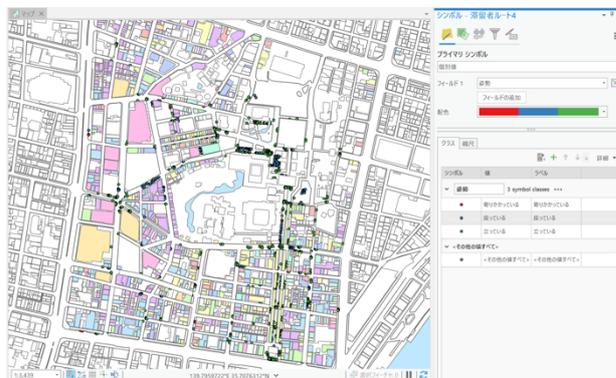


図-6 姿勢別に見た滞留行動の分布

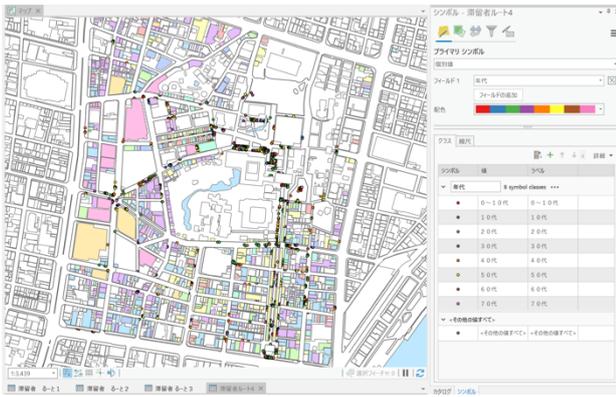


図-7 年代別にみた滞留行動の分布

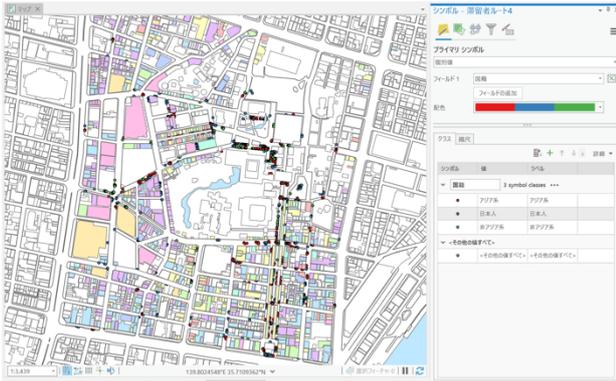


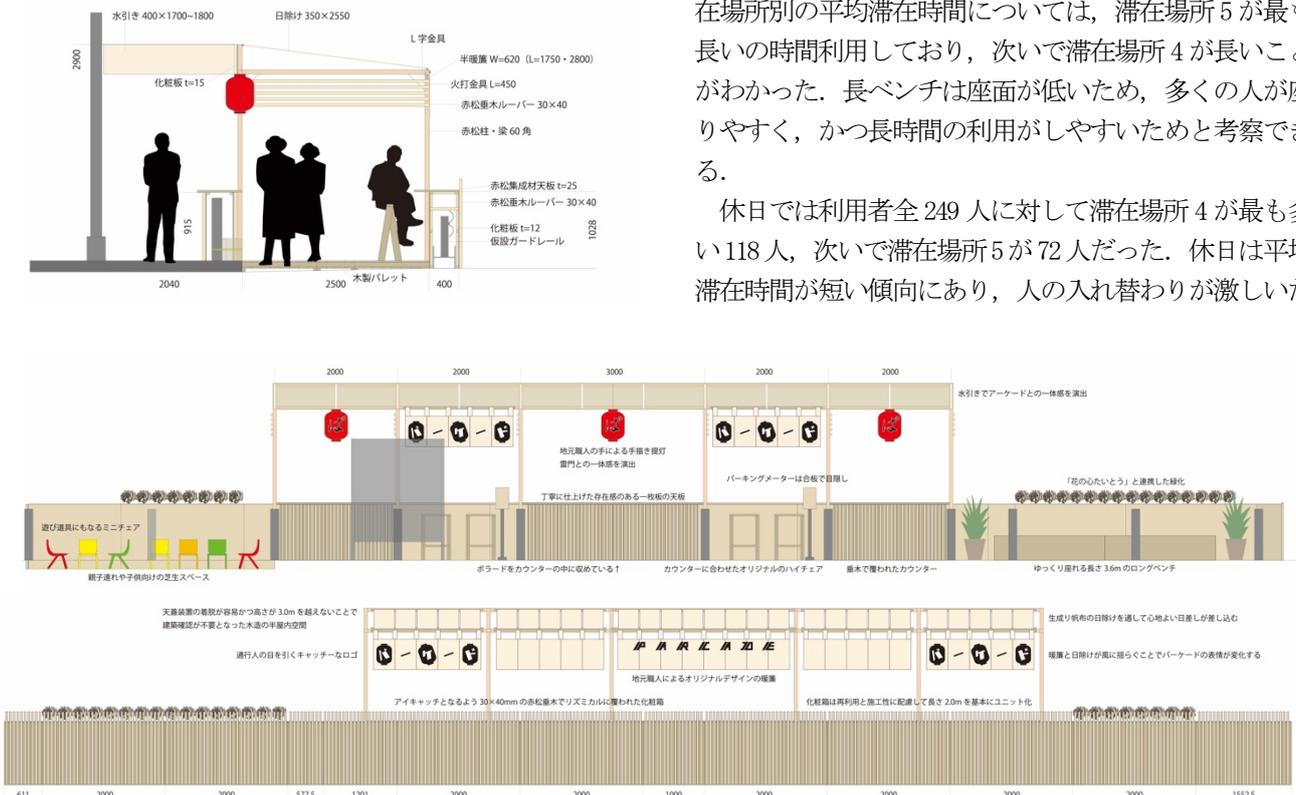
図-8 人種別にみた滞留行動の分布

3. パークレット社会実験

(1) パークレット社会実験・調査の実施

滞留空間が不足する浅草の雷門通りの車道上に、将来的な将来的な道路空間再編に向けた実証実験として、浅草

図-9 パークレット断面図・立面



寺雷門や仲見世の景観、商店街のアーケードと一体となったパークレットの設置を3月7日から3月13日の計7日間行なった。パークレット内には①から④の4つの出入口、1から6の6つの滞在場所(a:歩道側, b:車道側)が設けられている。主な設備としてカウンターテーブル:w600×d1940×h940・人工芝:3000×4000・長ベンチ:w4000×d400×h400・ハイチェア:w480×d335×h720×12脚・ミニチェア:w350×h350×10脚を設置した。

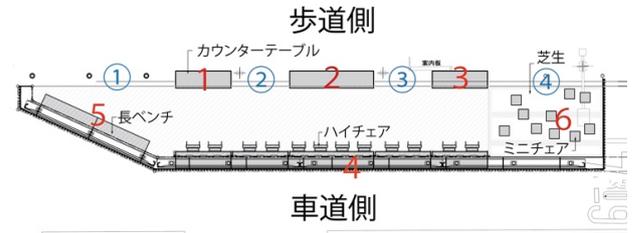


図-10 パークレット平面図

(2) パークレット社会実験の分析

3月10日(日・祝)の9:30~17:30計8時間・3月11日(月)の11:00~17:30計6時間30分について、定点カメラの映像をもとに、利用者の性別、年代、国籍、滞在時間、主な行動、出入りの場所、主な滞在場所、使用した什器等のデータを抽出した。

滞在場所別の利用人数について、平日の利用者全146人に対して長ベンチを設置した滞在場所5が最も多い66人、次いでハイチェアのある滞在場所4が42人だった(図-11)。休日では利用者全249人に対して滞在場所4が最も多い118人、次いで滞在場所5が72人だった。滞在場所別の平均滞在時間については、滞在場所5が最も長い時間利用しており、次いで滞在場所4が長いことがわかった。長ベンチは座面が低いため、多くの人が座りやすく、かつ長時間の利用がしやすいためと考察できる。

休日では利用者全249人に対して滞在場所4が最も多い118人、次いで滞在場所5が72人だった。休日は平均滞在時間が短い傾向にあり、人の入れ替わりが激しい

め、短時間の休憩には滞在場所4にあるような可変的な椅子が好まれる傾向にあると考察できる。

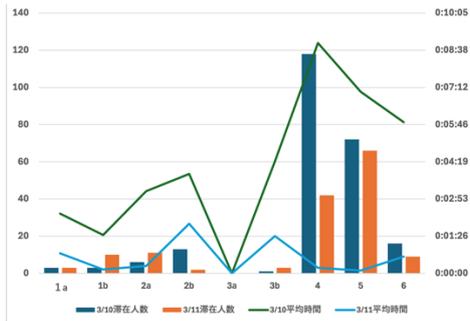


図-11 滞在場所別の滞在人数と平均滞在時間

利用者の行動では両日共に会話が多く、次いで休憩、写真撮影とスマホの使用の順で多い結果となった(図-12)。利用者の多くがグループでの利用だったことから、会話が多くなったと推察できる。

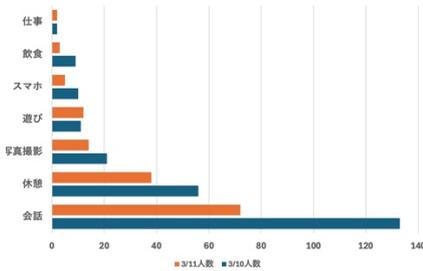


図-12 利用者の行動件数

年代別使用什器数については、平日と祝日で若干の違いが見られた(図-13)。平日では比較的40代までの若い世代ではハイチェアを多く使用しており、50代以降になると長ベンチを使用する割合が多くなっていった。長ベンチはハイチェアと比べ奥行きが長く、座りやすいためだと考えられる。一方、休日では多くの年代でハイチェアが多く使用された。休日はどの年代も滞在時間が短かったことが関係しているものと考察できる。

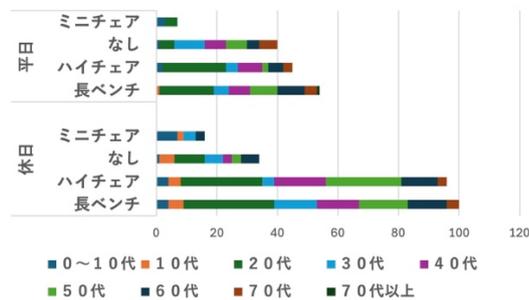


図-13 年代別の什器利用件数

利用者が出入りした場所については、両日ともに入場した場所と同じ場所から出る人が最も多いことがわかった(図-14)。また、滞在していた場所に近い場所から出ていることがわかった。入った場所から最も近い滞在場所に多くの利用者が滞留していたためだと推察できる。

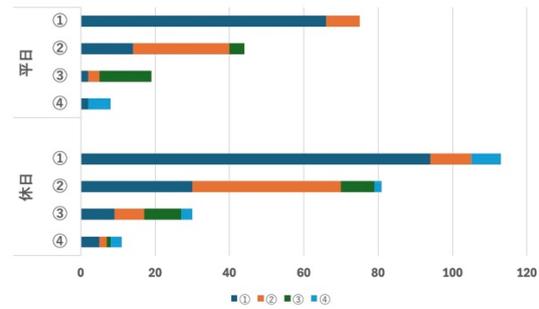


図-14 利用者の入出場所

4. まとめ・考察

本研究では、観光地である浅草を対象として、滞留行動の現状調査からパークレット社会実験までの一連の取り組みを通じて、観光地としての滞在快適性や回遊性の向上に効果的な休憩所のあり方を考察した。

浅草の現状調査の結果、道路に設置されている椅子や浅草寺周辺にある休憩所などを利用している来街者が多く存在する一方、これらの休憩場所以外での滞留行動が多いことから、より多くの人が休憩できる空間が求められていると考察する。

また、パークレット設置の社会実験の結果から、多くの年代で使用率の高かったゆったりと座れる長ベンチや、可変性のあるハイチェアが休憩所に求められているファニチャーであると考察した。

これらの結果より観光地における効果的な休憩所のあり方として、以下の3つの事項が重要であると考察した。

1 つ目は場所や目的に応じた休憩所の設置である。飲食店やランドマークなどの場所に休憩所を設置し、写真撮影や飲食等の観光客の行動に合わせた休憩空間をデザインにすることが重要である。

2 つ目は可変的なデザインのファニチャーの設置である。利用者の利用時間や目的に応じたデザインを採用することで、幅広い利用者に対応できる。

3 つ目は周りの環境要素を考慮することである。観光地では休憩所自体も観光資源の一部となるため、周りの景観を損なわないデザインである必要がある。

本研究の成果も踏まえ、休憩所のデザインや配置を工夫することで観光地としての滞在快適性や回遊性の向上を図ることが期待される。

参考文献

- 1) 中川 桃花：街路における滞留空間の利用実態に関する研究 - 姫路・神戸・大阪を対象として、大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻修士論文梗概集, 2021 巻, p1, 2022.
- 2) 鈴木 雄, 木村 一裕, 日野 智, 南出 拓也：街なかにおける歩行者の滞在特性と休憩空間の認識に関する研究, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol. 68, No. 5, p. I_417-426, 2012.